



2026年11月発行 企画製作：札幌文化芸術交流センター SCARTS、北海道大学 CoSTEP

執筆：一條理紀枝 (pp.8-16, pp.22-29)、市原佐都子 (pp.17-20) 編集：札幌文化芸術交流センター SCARTS、中西聖介 (STUDIO PT)

写真：岡田昌敏 (p.1, 11, 30)、北海道大学 電子科学研究所 知能数理研究分野 (p.7, 10, pp.12-13)、門間友佑 (p.8, 21)

デザイン：中西聖介 (STUDIO PT) 印刷：サノエムカラー

発行：札幌文化芸術交流センター SCARTS (札幌市芸術文化財団) 〒060-0001 札幌市中央区北1条西1丁目 札幌市民交流プラザ TEL: 011-271-1955

©SCARTS Printed in Japan

はじめに

本冊子は、『市原佐都子 肉の上を粘菌は通った』の開催にあたり、基盤となるプロジェクトの概要と、招聘アーティストである市原佐都子の制作プロセスを詳細に紹介するものです。

札幌文化芸術交流センター SCARTSでは、次代を担う世代が文化芸術に触れる機会を創出し、異分野との交流による文化芸術や表現活動の新たな可能性を追求しています。「SCARTS×CoSTEPアート&サイエンスプロジェクト」は、北海道大学 大学院教育推進機構 オープンエデュケーションセンター 科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) と共に取り組む、アート・サイエンス・教育の分野を横断したプロジェクトです。

プロジェクトでは、招聘アーティストの制作プロセスに沿って、研究者との交流の機会を計画するほか、高校・大学生へのアプローチについても模索しています。高校教育における探究学習は、「自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する」という過程を経験するもので、それは、複雑化する社会と向き合う現代のアーティストの創作過程と通じるものがあると考えています。作品という成果物だけを発表するのではなく、アートとサイエンスという異なる領域にまたがって「問いを立てる力、柔軟な思考、表現する力」を試されるアーティストの制作プロセスも発信することでプロジェクトを特徴づけます。

市原佐都子の創造力は、遠く非現実的な世界へと大きく跳躍したかと思えば、不意に私たちの現実へと舞い戻り、自己や社会を遠景から見つめ直す視点を与えます。その往復運動は、未知と既知を行き来しながら思考を深めていく探究の営みに重なり、自由な思考だけでなく、視点の更新を通して世界を多面的に捉え直す力を与えてくれます。

教育機関でも研究機関でもなく、文化施設で生まれる様々な気づきが、さらなる新たな探究の一助となっていくことを願っています。

最後に、本プロジェクトの進行にあたり多大なご協力とご支援をいただいた関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

CONTENTS

はじめに	p.3
アート&サイエンスプロジェクトについて	p.4
ワークフロー	p.5
テーマ「プレコンセプションケア」	p.6

RESEARCH REPORT

市原佐都子の探究	p.7
----------	-----

自分の身体への苦々しさからの解放 市原佐都子	p.17
--------------------------	------

EVENT REPORT (再録)

時間展望—もっと先の自分へ	p.21
---------------	------

『肉の上を粘菌は通った』市原佐都子	p.1
-------------------	-----

SCARTS×CoSTEPアート&サイエンスプロジェクト
市原佐都子 肉の上を粘菌は通った

会期：2026年1月31日(土)—2月11日(水・祝)

会場：札幌文化芸術交流センター SCARTS

主催：札幌文化芸術交流センター SCARTS (札幌市芸術文化財団)、
北海道大学 CoSTEP、札幌市

後援：札幌市教育委員会

協力：北海道大学 電子科学研究所 知能数理研究分野

助成：令和7年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

アート&サイエンスプロジェクトについて

札幌文化芸術交流センター SCARTSと北海道大学 CoSTEPが共同し、若い世代のアートとサイエンスに対する探究心や感性を育むことを目的としたプロジェクトです。アートの創造性と科学的な探究との相互交流により、世界をひろげる学びの場をつくることを目指しています。

社会的に関心の高い科学的トピックからテーマを設定し、アーティストはそのテーマを出発点として自身の関心領域に引き付けリサーチを重ね、表現に結びつけます。その新たな視点や価値を見出す過程を一緒に体験するトークイベントやワークショップ、成果発表会を実施しています。



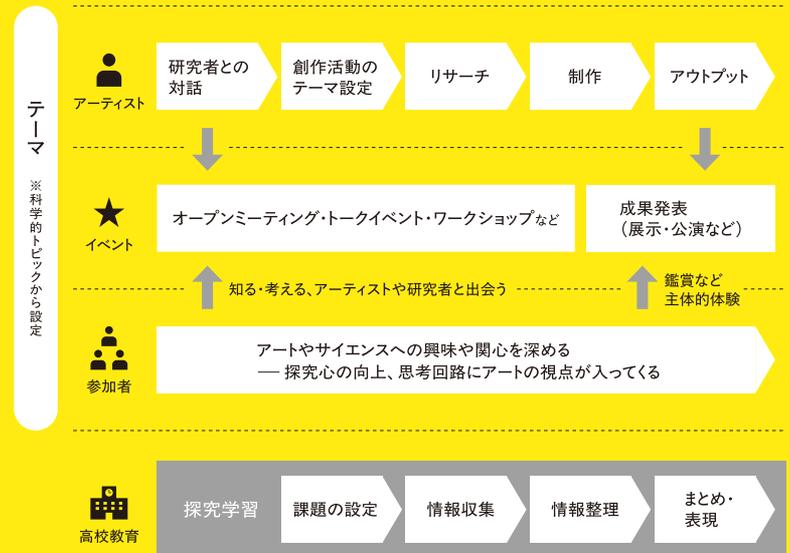
札幌文化芸術交流センター SCARTSは、2018年にオープンした札幌市中心部にあるアートセンターです。札幌文化芸術劇場 hitaru、札幌市図書・情報館と共に札幌市民交流プラザを構成し、札幌における文化芸術の拠点です。市民の創造性ある活動をサポートし、札幌の文化芸術を支え、育てていくために、「あたらしい表現の可能性をひらく」「すべての人に開かれたアートとの出会いをつくる」「一人ひとりの創造性をささえる」という3つのミッションを定め、活動をしています。



北海道大学 大学院教育推進機構 オープンエデュケーションセンターに設置されている、科学技術コミュニケーション教育研究部門 CoSTEP (Communication in Science & Technology Education & Research Program; コーステップ)は、科学技術コミュニケーションに取り組む、北海道大学の教育・実践・研究組織です。科学技術コミュニケーションの教育・研究・実践を、互いに有機的に関連づけつつ、学内外の機関と積極的に連携を進め、科学技術コミュニケーション活動を担う人材養成を行なっています。

ワークフロー

本プロジェクトでは、招聘するアーティストの一連の創作過程をプロジェクト全体の基軸として、ワークフローを設計します。アーティストの創作過程を、研究者との対話・テーマ設定・リサーチ・制作・アウトプットの5つに分け、各過程で生まれるさまざまな事柄をイベント化し、参加者とアーティスト、研究者との交流の場を作り出します。また、この一連の過程は、学校教育で取り組む「探究学習」の流れと緩やかに同期しており、各過程でアーティストがどのように考え、決定し、行動に移すかを知ることが、参加者自身の探究活動のヒントになると考えます。



テーマ「プレコンセプションケア」

公衆衛生学で研究されている「プレコンセプションケア」は、男女問わず、将来の妊娠・出産を見据え、現在の健康状態を確認したり、生活習慣の見直しを行ったりすることを指します。この考え方は、ライフステージやライフプランに応じた健康づくりを目指すものです。国際的には、WHO（世界保健機関）が「妊娠前の女性、カップルに対し、医学的・行動学的・社会的な保健介入を行うこと」と定義し、積極的に取り組むことが推奨されるなど、近年ますます注目されています。

2024年に札幌で開催された第83回日本公衆衛生学会総会においても「プレコンセプションケア」は話題であり、その重要性が再認識されました。さらに、令和6年度の札幌市学校教育の重点に含まれるキーワード「ウェルビーイング」の実現に向けた課題として、性教育のみならず、ライフプランを意識するための学習にも関連があると考え、このテーマを選定しました。

「プレコンセプションケア」を「アートとサイエンス」の視点で考えると、西洋医学に基づく栄養や身体のケアは、データや理論に裏打ちされた「サイエンス」であり、健康を維持し、妊娠に備えるための実践的なアプローチと考えられます。一方でライフステージやライフプランといった将来を見据えた考え方は、個人の価値観や主観的な判断に基づくもので明確な答えがなく、これは、自分がどう考えるかといった「アート・創作活動における視点」と重なります。

こうした背景を踏まえ、今回選定した「プレコンセプションケア」のテーマは2024年度から継続して検討してきたものであり、同年8月1日にはプロジェクトのキックオフとして、「アーティストと研究者と考えるオープンミーティング『時間展望—もっと先の自分へ』」を開催しました。本イベントでは2名のアーティストを招聘し、研究者とともに本テーマについて考える場を設けました。2024年度は招聘アーティストの荒木悠による成果発表展『双殻綱：幕間 BIVALVIA: INTERMISSION*』を実施し、2025年度は市原佐都子による探究・創作活動を展開します。

*令和6年度に実施した、本事業における荒木悠（アーティスト・映画監督）の成果発表展で、2025年2月15日（土）から3月2日（日）まで開催した。

RESEARCH REPORT

市原佐都子 の 探究

2024.8.1

市原佐都子は札幌文化芸術交流センター SCARTS にいた。アーティストと研究者と考えるオープンミーティング「時間展望—もっと先の自分へ」(本冊子P.21にイベントレポートを再録)を終えて、さまざまな思いが去来している。この企画に関わるまでは知らなかった「プレコンセプションケア」、健康管理と人生設計、もともと関心のある人間の生殖……。翌日には、北海道大学の研究者のもとを訪ね、男性不妊や不妊治療の知見を深めた。

当時の思いを、のちにこう振り返っている。「私は生殖やルッキズムにまつわることも作品にしていますが、その延長で、将来的に科学が進歩すれば、どんな子どもの産み方があり得るのだろうか。また、デザイナーベイビーをつくるとしたらどのような子どもをつくりたいか、そういうことに興味がわいていたような気がします」子どもを産むとは、どういうことなのか。科学や最先端技術による産み方の変化、人間をつくるということ、本能以外の動機から子どもをもつということ……。市原の思索は続く。

2025.7.10

再び、北海道。市原は、プレコンセプションケアに関するリサーチを続けていた。書籍を読み、調べ、考え、想像をめぐらせ、また考えた。そして、専門家への取材が決まる。この日は、北海道大学の繁富(栗林)香織さんに会いに行く。

**折り紙の技術を再生医療、不妊治療に**

繁富(栗林)香織

北海道大学 大学院教育推進機構 准教授(バイオ折り紙エンジニア)

日本伝統の折り紙は、折ることで「強度が増す」「立体がつくれる」「小さくたためる」という特徴があります。それを科学的に研究して、いろいろな分野に生かすのが折り紙工学です。私は、宇宙で使うソーラーパネルの開発を目指し、ラワンブキの葉の展開構造を研究していました。その後、折りたたまれた状態から開くというしきみを医療に応用して、形状記憶合金の人工血管を開発します。さらに研究を続けて生まれたのが、「細胞折り紙」。細胞の牽引力と半導体の加工技術を用いて、細胞を立体化する技術です。展開図(設計図)どおりの形に組み立てられるため、臓器がつくりやすくなり、再生医療での活用に期待されています。今年から不妊治療の研究を始めました。iPS細胞の折りたたみに成功すると、受精卵のダミーがつくれるので、妊娠の確率を上げられると考えています。というのも、受精卵は一つだけで培養すると寂しくて死んでしまい、たくさんの仲間と育てるとよく成長するからです。次世代の治療になり得るように、これから本格的に実験を進めていきます。

「私も現実から飛躍させたフィクションを描いてきましたが、繁富先生の取り組みは、私の創作ともとてもつながる部分が多かったです」



訪問した14日後、内閣府の生命倫理専門調査会は、ヒトのiPS細胞からつくった精子と卵子を受精させる基礎研究を、条件付きで容認する報告書をまとめた。不妊や先天性疾患の原因解明などに役立つと期待されている。

2025.7.11

再び、北海道大学。向かったのは、電子科学研究所の知能数理研究分野にある研究室。ここでは、物理学や情報科学を用いた「動物行動学」の研究がされている。さて、人間以外の生物の営みとは――。まず、培養室を見学する。特任助教の越後谷駿さんによると、ここにいるのは「原生生物」。大学構内の川や池などから採取し、温度や光を最適にした環境のなかで培養している。

例えば、ソライロラップムシ(右写真)。ふわふわと「泳ぐ」が、エサや隅の空間を見つけると、その場に「くっつく」という行動をとる。からだは美しい空色。これは毒性の色素で、天敵に遭遇すると放出して難を逃れる。基本は無性生殖(細胞分裂)。しかし、分裂の限界を避けるため、有性生殖である接合を行うこともある。ならば、オスとメスがいるのだろうか――。実は、いる。

ソライロラップムシなど、繊毛虫の仲間には、性別のようなものがある。人間の男／女とは異なるが、人間の生殖と同じように、遺伝子を交配して、新しい遺伝子型をつくるのだという。

粘菌と総称される生き物たちがいる。「菌」と名付けられているが菌類ではなく、アメーバの仲間とされる単細胞生物である。こちらは植物のような孢子で繁殖し、動き回り、バクテリアなどを食べるといった動物的な特徴を併せ持つ不思議な生物である。また、菌類であるキノコのように

な形状をとることもあり、変形菌とも呼ばれる。暗幕に覆われた棚、そこに置かれたケースの中にびっしりと黄色の「スライム」が詰まっている。それが、モジホコリ。粘菌の一種で、脳をもたないが、知能が備わっているとしか考えられない行動をとるらしい。



RESEARCH NOTE 02

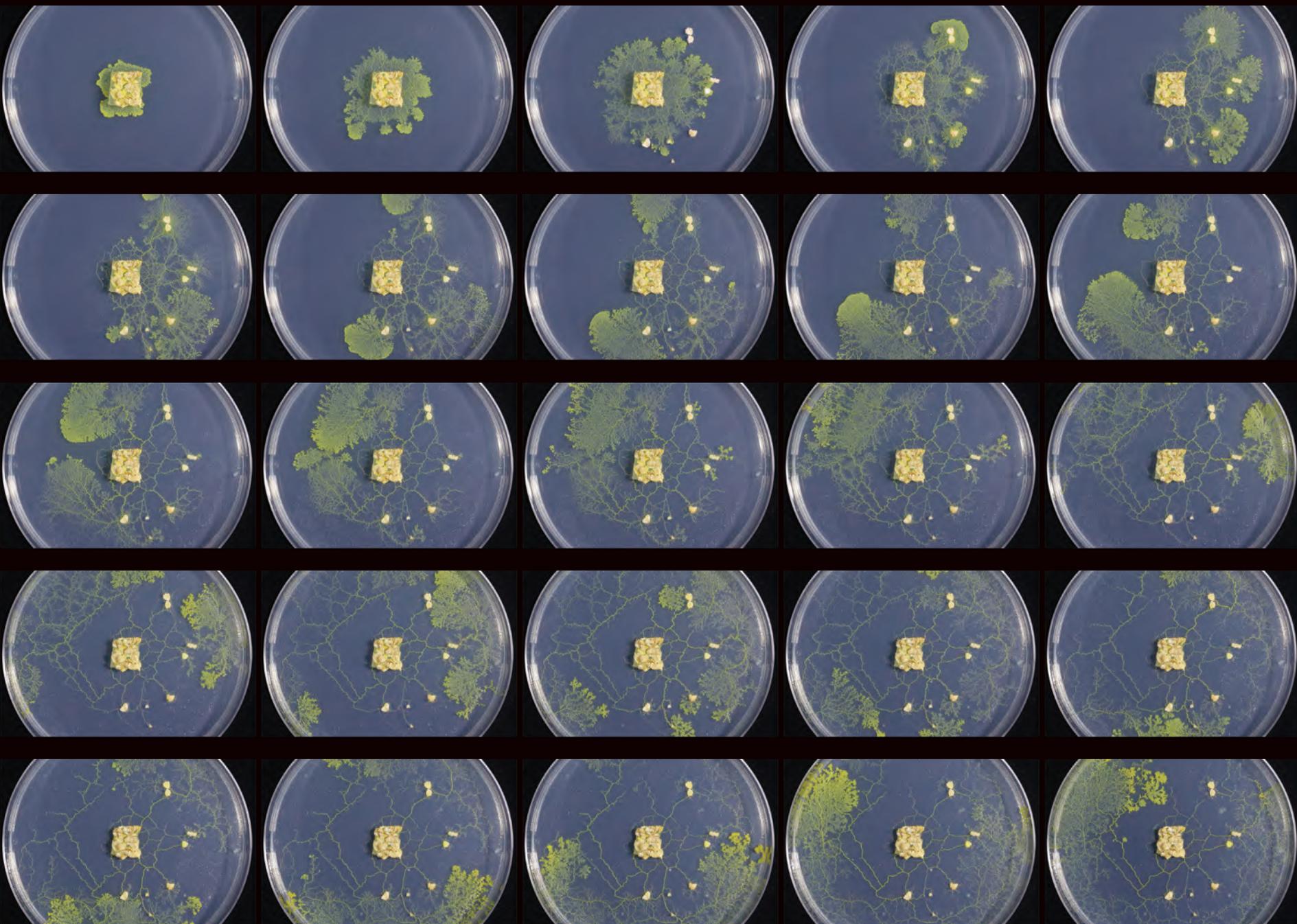
原生生物の「知性」を解き明かす

中垣俊之

北海道大学 電子科学研究所 教授

粘菌に限らず、原生生物の多くはバクテリア(細菌)を食べて生きています。この営みがないと、例えば、樹木は育たず、森にはなりません。生態系のなかの非常に大事な一員であることは間違いないのです。では、どんな役割を担っているのか。それを端的に説明できるほどまでは解明が進んでいません。ただ、近年は次々と新種が見つかり、遺伝子解析によって多様性が明らかになってきています。

原生生物はおもしろいです。その行動に関心があり、主にモジホコリの研究を続けてきました。動物の知性を測る迷路実験を行ったところ、最短経路で好物のオートミールにたどり着きました。別の実験では、鉄道網と同じようなネットワークを築きあげました。さまざまな実験結果から、環境に最適化した行動をとっていると考えられるのです。この適応行動を引き出す知能のようなもの、いわば「原生知能」の正体としくみを解明しようと立ち上げたのが、「ジオラマ行動力学」。複雑な自然環境を再現したジオラマ環境で、100種類を超える原生生物を観察し、法則性を定式化していきます。



モジホコリの振る舞い

網目状に広がる「モジホコリ」。
一つの細胞から成るが、その内部には遺伝情報 (DNA) を
格納した核を何百～何億個ともつ。

そのため、分断してもそれぞれが生き、再び融合することもあるという。
ギネス世界記録には、6平方メートルを超える個体が「世界最大の単細胞生物」として
認定されている。1時間に1センチほど動く。

市原佐都子は劇作家である。舞台俳優として経験を積み、劇団Qを主宰し、演出家としても活躍している。自らの感性とリサーチから得たものを咀嚼し、言葉に移し替え、物語を紡ぎ、「演劇」として仕上げる。本プロジェクトの成果発表の形式は「展示」。市原にとっては初の試みとなる。しかし、表現手法はそれほど迷わなかった。2025年初夏には「合唱」というアイデアがすでにあり、北海道リサーチで高校の合唱部を見学している。

MONOLOGUE

あるインタビューで市原は、初めて台本を書いた時の経験として、長いモノローグを書き、舞台をつくる手がかりとしたことを語っている。自著のあとがきにはこういう記述がある。大学の卒業制作ではじめて劇作と演出を手がけたときの回想だ。—深夜、うつ伏せで寝ている女の体内に「虫」が侵入して、去っていく、という内容のモノローグから始まる。自分の身体の生理現象や感覚に執着し劇作した。それが演劇と生活を繋ぐ方法だと思った。『バックスの信女—ホルスタインの雌』あとがき (pp.168-169) 「人間は増えなければならないのか?」という問いは市原の頭の中を反復する。粘菌や単細胞生物のシンプルな在り方が人間中心の世界観を相対化しているように思えたのである。

2025年の猛暑のなか、iPS細胞や粘菌に触発されて市原は書いた。「人間ではないものの声を書いてみよう、二つのモノローグを書きました。ひとつは肉体のない声、もうひとつは肉しかない声」。それが『肉の上を粘菌は通った』(本冊子に別冊として収録)である。二つの肉のモノローグを書き上げたとき、市原の脳裏にはあるイメージが浮かんでいたという。「モノローグの上を粘菌が這って、それが合唱曲として響いたら?」人間の合唱という初期のアイデアを捨てた。歌うのは、粘菌だ。モノローグの肉の上を粘菌が這い、合唱するのだ。

COLLABORATION I ART×ART

人間ではない者による合唱。粘菌に歌わせる方法。市原にはアイデアがあった。AIだ、AI (Artificial Intelligence / 人工知能) を使えば粘菌の合唱は実現するのではないだろうか。アーティストの岸裕真さんに連絡をとり、協働を依頼した。岸さんは、もともとは研究者だった。慶應義塾大学と東京大学大学院でAIを研究していた。その後、東京藝術大学大学院で先端芸術表現を専攻し、いまは、自分が開発したAI (Alien Intelligence / エイリアンの知性) とともに絵画や彫刻、インスタレーションを制作している。研究と創作の両面からAIと向き合ってきた専門家で、協力を得られると市原のアイデアの実現可能性はぐっと高まる。



岸裕真《Organs》2025年 | Photo by Yunosuke Nakayama

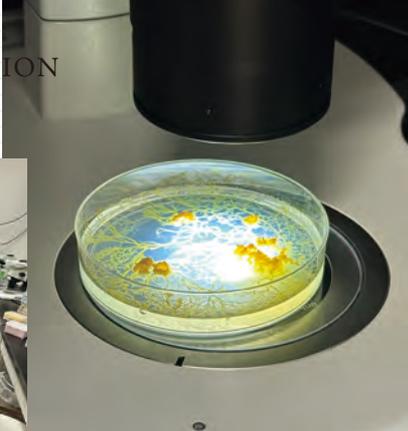
作品のコンセプトは「粘菌がAIを操作して合唱する」。では、粘菌にAIを操作させるにはどうすればいいのか。岸さんが考えたくみは、粘菌の動きをデータ化する→それを「市原佐都子LLM^{*}」に入力して歌詞を生成する→それをAI合唱システムに入力して合唱をつくるというものだ。

COLLABORATION II ART×ACADEMIA

合唱の成否は粘菌の動きにかかっている。そこで、北海道大学の中垣俊之さんと越後谷駿さんに協力を仰ぐ。果たして粘菌の動きはデータとして取得できるのか? 越後谷 | 粘菌の動きをデータ化する方法はいくつか考えられますが、「厚みの変化」が利用できます。モジホコリは約1分周期で動いていて、部分ごとに厚くなったり薄くなったりします。その変化をカメ

ラで記録して解析するのです。岸 | AIは人間だけが使うのではもったいないと思うんですね。使い方の可能性がどんどん見つかっているのが、AIの魅力なので。人間とは異なる知的存在がLLMを操作するというのは、創作の新しい手法になると考えています。だから、「厚みの変化」という粘菌の原始的で生命的な動きを「入力」に使えるのは、とても良いし、面白いですね。市原 | 粘菌は単細胞生物ですが、個体なのか集団なのかが曖昧な存在に見えます。その姿が、各パートの音が響き合い、全体として美しいハーモニーとなる合唱と重なりました。また、さまざまな情報から行動を最適化するところは、AIのようでもあると思いました。そこから合唱のアイデアにつながったのですが、粘菌は一つの大きな塊になったとき、そのなかでのパートごとの役割はあるのですか? 中垣 | 粘菌は部分ごとに周期的な収縮

* LLM = Large Language Model (大規模言語モデル)、大量のテキストデータを学習した自然言語処理モデル



リズムを刻んでいますが、少しずつずれていきます。でも、全体としてはオーガナイズされているのは間違いありません。それぞれの部分の揺らぎを一つひとつ音に変換して、位置が近ければ相関を強く、遠ければ相関を弱くして全体をまとめられると、市原さんの表現したい合唱になるのかなと思います。

CREATION

秋が深まるころ、岸さんは竹森達也さんと成瀬陽太さんを作品制作のメンバーに加え、北海道に飛んだ。中垣さんと越後谷さんを訪ね、モジホコリの動きを確認し、作品の素材を集めた。制作は大詰めだ。

これまでにない手法で制作を進める市原はこう語っている。「今回は私がテキストとコンセプトを考える劇作家で、岸さんが作品をかたちにする演出家のように感じます」。さらに研究者の知見やアイデアが加わり、影響も大きい、『肉の上を粘菌は通った』という一つのインスタレーション作品となっていく。

COLLABORATOR

岸裕真



アーティスト | AIを「Alien Intelligence (エイリアンの知性)」と捉え直し、人間とAIによる創発的な関係「エイリアンの主体」を掲げて、自ら開発したAIと協働して絵画、彫刻、インスタレーションの制作を行う。

成瀬陽太



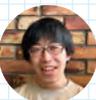
アーティスト・映像作家 | 知覚現象やAI技術を用いたインスタレーションの制作、MUTEK.JPへの出演、リアルタイム映像演出など、技術・メディアを横断する表現活動を行う。また、他アーティストのプロジェクトに参画し、システム設計や実装を行う。

竹森達也



株式会社アブストラクトエンジン | エンジニア・テクニカルディレクター | 京都大学・大学院にてロボティクス研究に従事し、博士(工学)を取得。ロボカップ世界大会レスキュー実機リーグ優勝、日本機械学会業績賞などを受賞。

越後谷駿



北海道大学電子科学研究所 特任助教 | 北海道大学生命科学院の中垣教授のもとで、単細胞生物ラッパムシの空間把握行動を研究。ラッパムシがすみっこに好んで固着する習性を見つけ博士号を取得。いつか原生動物とコミュニケーションを取りたいと思い、日々研究している。2018年北大CoSTEP本科修了。

ESSAY

自分の身体への 苦々しさからの解放

市原佐都子

健康を整えることは正しい

「プレコンセプションケア」という言葉をこの企画に携わるようになり初めて知り、24年に開催されたトークイベントの準備として、読みやすそうな本¹⁾を選んで読んでみた。男性の課題に比べ、女性の課題や心身にまつわる悩みについて書かれている分量の多さに、なぜ女性だけが産むからだの持ち主なのだろうか、と自分の身体を苦々しく感じた。イベントでは荒木悠さん(アーティスト・映画監督)と一緒に登壇し、公衆衛生学や産婦人科の先生のプレゼンテーションを聞いた。有益な内容で、目先の価値や日々の生活に囚われて、見失いがちになってしまうが、将来を見据えて自分のからだの健康管理をすることの大事さが本当によくわかったし、可能性の塊のように見える若い方々がプレゼンテーションを真剣にきいている姿を見て、「健康」というものはどうしたって価値のあることだから、それを伝える先生たちと共にイベントに参加していることに妙な感動を覚えた。まっすぐに正しいことを伝えて、正しさを人間を守ろうとしている人の横にいる自分。普段、劇場で作品を発表したときは違う感覚だった。同時に、妊娠・出産について個人の健康管理や健康な子供を産むことに重点を置いて話すことに違和感があった。私はこの世界に子供を生むとはどういうことなのか、もっと大きく捉えてみたかった。それに、これだけ科学が急速に進歩しているなら、私たちの個人の問題もすべて科学で解決されるようになり、「プレコンセプションケア」という考え方自体に意味がなくなる未来もあり得る? いま自分が囚われて震えていることが取るに足らない問題に変わってしまう未来があるのなら知りたいと思った。

シャーレ、単細胞生物、合唱部

リサーチをする前は、科学が進歩した未来ではいままでと異なった生殖の仕方があるのか、また私はルッキズムを扱った作品をつくったこともあったので、その延長でデザイナーベイビーが可能になった未来では人々はどのような外見に子供をデザインするだろうかという興味を漠然と持っていたように思う。アウトプットの仕方としては、合唱隊をつかった作品をつくったこともあったので、私が合唱曲の歌詞を書いて誰かに作曲してもらったものを地元の中高生の合唱部に歌ってもらうアイデアもあった。25年7月に実施されたリサーチでは、まず繁富(栗林)香織先生を訪ねて、先生が取り組んでいる折り紙の技術を不妊治療に役立てる話、iPS細胞の話、研究者としての倫理観の話などを聞かせていただいた。印象的だったのは、体外受精した受精卵から培養された胚を体内に戻す不妊治療で、高齢の場合など1個しか受精卵が取れないこともあるが、1個でも20個の場合でも入れられるシャーレの大きさは同じ。受精卵が1個の場合は大きな部屋(シャーレ)に一人でぼつんというような状態になり、20個の間隔がいっぱいいる状態に比べ、寂しくて死んでしまうことがある。先生は1個でぼつりという受精卵にダミーの仲間(受精卵)を折り紙の技術を用いて作り、本物の受精卵を元気づけようと考えているそう。先生の一人でぼつりという表現から、シャーレの上での人間のような細胞のドラマについて想像した。翌日、粘菌を研究している中垣俊之先生の研究所も訪ねた。顕微鏡を通して様々な単細胞生物や、研究所で飼育されている粘菌(モジホコリ)を見せていただきながら越後谷先生からお話を伺った。単細胞生物たちそれぞれに独自の生存方法があり、それに適した機能的な動きとフォルムをしている。生き物の美しさってこういうことなのかと思った。それは人間が社会的につくった美醜をちっげなものと感じさせる力があるように思った。前日にCoSTEPの方から紹介された韓国のルッキズムに関する本²⁾を読んでいたせいもあるかもしれない。人間とは異なる生き物に触れると自分の身の回りの世界の捉え方が改められる。その後、北大を出て高校生の合唱部の練習も見学させてもらった。

AIによる粘菌の合唱のようなもの

リサーチの後、単細胞生物に関して興味が湧き何冊か本³⁾を読んでみた。どんな作品にするか悩んでいたとき、ネットの記事⁴⁾で「バーストライキ」を知った。「バーストライキ」とは気候変動など未来の世界に対しての問題に大人たちが解決策の道筋を示さない限り子どもを産

まないと訴える運動だ。プレコンセプションケアについて考えていた私には、整えるべきは個人の健康ではなく、地球の健康だ、とバーストライカーの彼女たちが言っているように見えた。女性たちの存在しない子供たちは、存在しないことで世界に影響を持つと言えるかもしれない。存在しないことで地球の健康に貢献する。そこから、存在しないものによる聞こえるはずのない声のモノログという発想を得て、二つの肉体的ない肉のモノログを書いた。一つ目は「母」が生まないことを決めたのでこの世にいない肉。二つ目は、全体を持たずシャーレの上に肉片としてのみある培養肉。本来は言葉にも声にもならず、人間には聞こえるはずもなく、もちろん歴史にも残らない。そんな声を粘菌は聞いているのではない。聞いているというよりも、粘菌は運動することで知性的に世界を捉えているように見えるから、その存在しない肉の上を粘菌は通ったのだ。そこにはなんの感情もない。ただ通った。その運動によって捉えたものが合唱になって響いたら？合唱は複数人が各声部を歌い、その声の重なりがハーモニーとなる。それはひとつの塊の中に複数の役割があり全体を成している粘菌の特徴と重なって見える。それに粘菌はAIのようでもある。AIも粘菌もひとつの司令塔を持たず全体の状態から行動を最適化するし、人間とは異なる知性の在り方を見せているように感じる。AIで粘菌の合唱をつくるアイデアが浮かんだ。

Alien Intelligence

しかし、いったいそれはどんなものなのだろう。粘菌の合唱とは？想像できない方向に進んでみたい、創作しているときいつも思うことだ。そこでAIを“Alien Intelligence(エイリアン・インテリジェンス)”と読み替えて、AIを単なる人間の便利な道具ではなく、未知のものとして捉え共に作品を創作されている岸裕真⁵⁾さんと、協同することを思いついた。私にとっては岸さんがエイリアンのように感じる。エイリアンの知能をお借りしたい。岸さんが私の渡したむちゃぶりのバトンを受け取って、成瀬陽太さん、竹森達也さんの強力な布陣で、私の執筆したモノログを学習したLLMや、越後谷先生の撮影した粘菌の運動を読み取って得られた数値から、合唱曲をつくり、それを私の肉声をサンプリングしてできた音声データが歌う。私の書いた文章や声から岸さんたちがAIをつけて生み出した合唱が出来た。私一人の声が複数の声部を歌って、まるでそれは個体なのか集団なのか曖昧に見える粘菌のようだ。人間がいなくなった後もAIは人間の残したものでこうして曲をつくって誰もいない地球でその曲を響かせるかもしれない。

ここまで振り返ってみて私は妊娠・出産を個人の人生設計や健康管理

の問題として捉えたくない想いが根底にずっとあったことに気づいた。それは「プレコンセプションケア」を知って感じた自分の身体への苦々しさからの解放を求めているのかもしれない。

- 1 金山尚裕『「プレコンセプションケア」ってなんですか?: 国立医大名誉教授産婦人科の名医が教えるプレコンセプションケア教本』Independently published, 2022年
- 2 エリス・ヒュー(著)、金井真弓(翻訳)、桑畑優香(監修)『美人までの階段1000段あっても潰れそうだけどこシートマスクを信じてる』新潮社、2025年
- 3 - 中垣俊之『ヤマケイ文庫 考える粘菌 生物の知の根源を探る』山と溪谷社、2023年
- 末友靖隆(著)、友永たろ(イラスト)『おもしろミクロ生物の世界 ミジンコ・アメーバ・ゾウリムシ なかまたちが大集合!』偕成社、2019年
- ジャスパー・シャープ、ティム・グラバム(著)、川上新一(監修)『粘菌 知性のはじまりとそのサイエンス: 特徴から研究の歴史、動画撮影法、アート、人工知能への応用まで』誠文堂新光社、2017年
- 南方熊楠(著)、中沢新一(編集)『森の思想(南方熊楠コレクション)』河出書房新社、2015年
- 4 中村佑子「なぜこの世界で子どもを持つのか 希望の行方 第5回 いまバーストライカーと呼ばれる女性たちがいる」集英社新書プラス、2025年9月26日 https://shinsho-plus.shueisha.co.jp/column/why_have_children/31981
- 5 岸裕真『未知との創造: 人類とAIのエイリアン的出会いについて』誠文堂新光社、2025年

いちはら・さとこ | 劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督

2011年より劇団Q始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。2011年、戯曲『虫』にて第11回AAF戯曲賞受賞。2019年に初の小説集『マミの天使』を出版。同年『バックスの信女—ホルスタインの雌』をあいちトリエンナーレにて初演。同作にて第64回岸田國士戯曲賞受賞。2021年、ノイマルクト劇場(チューリヒ)と共同制作した『Madama Butterfly』をチューリヒ・シアター・スペクタクル、ミュンヘン・シュピラート演劇祭、ウィーン芸術週間他にて上演。2023年、『弱法師』を世界演劇祭(ドイツ)にて初演。2025年、ロームシアター京都「レパトリー」の創造で『キティ』を発表、シアターコモンズ'25、パリ・フェスティバル・ドートンヌで上演。

EVENT REPORT

SCARTS×CoSTEP
アート&サイエンスプロジェクト

時間展望—もっと先の自分へ

(再録)



アーティストと研究者と考える
オープンミーティング

2024年8月1日(木)
14:00~17:00

会場: SCARTS モールC
主催: 札幌文化芸術交流センター SCARTS
(札幌市芸術文化財団)、北海道大学 CoSTEP、札幌市
後援: 札幌市教育委員会
助成: 令和6年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

「時間」を意識するとき、それは「時刻」であり「期日」であり、「記録」や「歴史」「過去」「未来」で、いずれにしても、時の流れのなかの「瞬間」あるいは「瞬間から瞬間までの長さ」を思い描くのではないでしょう。ところが、人生には「時間」を区切らずに展望するべきときがあります。SCARTS×CoSTEPアート&サイエンスプロジェクトのテーマに掲げられた「プレコンセプションケア」にも時間展望が欠かせません。

もっと先の私のために、 いまの私はなにをする？

真夏の昼下がり、眼下に創成川を望む開放的な会場には、「時間展望」や「もっと先の自分へ」という言葉、現代アート、科学技術コミュニケーションに関心をもった高校生や大学生、教育関係者から一般の方々までたくさんの方が集まってきました。これから3時間かけて、2名のアーティストと2名の研究者とともに、自分の「性」と「生」から「人生」を考えていきます。

イベントタイトルの「時間展望」とは、「未来における可能性を予測して見通しを立てること」。モデレーターを務めた北海道大学CoSTEP特任講師の朴炫貞さんによると、「個人を軸にして、過去・現在・未来という時間の流れを意識しながら、より良い未来をつくれるように人生設計を考えていくこと」であり、参加者それぞれには「一人ひとりの物語」を見つけてほしいといいます。未来の自分のために、過去からつながる現在の自分はなにをするべきなのか——。さて、探究のはじまりです。

PROFILE

朴炫貞(ばく・ひょんじょん) | 北海道大学CoSTEP特任講師、博士(造形)(武蔵野美術大学)、アーティスト。韓国芸術総合大学と武蔵野美術大学大学院で芸術を学び、作品づくりとアートを通じた科学技術コミュニケーションの実践研究を行っている。



TOPIC 1

性と人生を考える「プレコンセプションケア」

前田 恵理

北海道大学 大学院医学研究院 准教授

私の専門である「公衆衛生」は、市民や国民など集団のみんなが健康であるためには何をしたらいいのかを研究します。

今日お話ししたいのが「プレコンセプションケア」。あまり聞きなれないかもしれませんが、プレ(pre-)は「～の前」、コンセプション(conception)は「受胎・妊娠」を意味する英語で、つまり、妊娠前から健康づくりをしていこうという取り組みです。昔は、妊娠してから健康に気をつけて元気な赤ちゃんを産みましょう、という考え方が主流でした。一方、今は、妊娠とはほど遠いうちから健康になっておけば、健やかな妊娠と出産を迎えられるという考え方になっています。ではなにをするかというと、「バランスの良い食事をとる」「太りすぎや痩せすぎに気をつける」「お酒は飲みすぎない」「タバコは吸わない」など、保健体育の授業で習う健康づくりです。

プレコンセプションケアは、「ライフコースアプローチ」に基づいています。これは、胎児期から老年期に至るまでの人生を通して健康のための対策を講じ、病気のリスクを下げ続けること。人間は受精から胎児期、小児期など成長段階にあ

る時期に、いちばん周囲の環境の影響を受けやすく、健康な親の子どもは、生まれたときから病気にかかりにくいといわれています。また、幼いころからの積み重ねで健康的な生活習慣を身につけることができれば、生涯にわたって病気にかかるリスクの低い人生を送れると考えられるのです。

一例をあげると——。DOHaD(ドーハッド)仮説と呼ばれる学説があり、小さく生まれた赤ちゃんは、将来生活習慣病になりやすいと、世界中の研究からわかっています。それを踏まえると、気がかりなのは若い女性たちのエネルギー摂取量がどんどん減っていること。過度なダイエットは次世代の健康を損ねてしまうかもしれません。だからこそ、ライフプランを考えてほしいのです。いつかは子どもがほしいのかどうか、ほしいのであれば、「いつ」「何人」産みたいのか、そのときがくるまではきちんと避妊する、そのためにも早め早めの健康づくりを心がける……と、ちょっと将来に考えをめぐらせてみてください。「性と生殖の健康と権利」は一人ひとりにあり、それらを決めるのは自分なのです。

PROFILE

まえだ・えり | 博士(医学)(東京大学)。専門は公衆衛生学。不妊症に悩む人を減らし、患者に対するより良い支援のあり方を提案するため、プレコンセプションケアを中心としたさまざまな社会医学的研究を行っている。



自分と人類の過去から未来を見つめる作品づくり

荒木悠

アーティスト・映画監督

過去・現在・未来を展望してみると、私は、文化の伝播や異文化同士の出会い、またその過程で生じる誤訳や誤読のもつ可能性に強い関心を寄せていると気づかれます。その原点は学生時代の自分探し。個性がなくて空っぽだとわかってから、作品をつくるときは、自分の内面にテーマを求めるのではなく、人生のなかでの発見や出会い、歴史上の出来事をもとに未来を見つめ直すという方法をとるようになりました。

これまでの私の仕事は、自分の意思ではない出来事によって導かれてきました。ひとつは、幼児期と思春期をアメリカで暮らした「越境の経験」、もうひとつは「衝撃的な出会い」。ワシントン大学2年生の時に、黒船を率いたあのペリー提督の子孫だという新生と出会い、びっくりして思わず彼と握手しちゃいました。そのとき、個人と歴史と時空がぐにゃ〜と大きく歪んだような感覚にとらわれたんです。その体験は、自分が日本人としてアメリカにいるという社会的文脈や歴史を意識させるきっかけとなりました。

今日は2つの作品を紹介します。まず、十和田市現代美術館の個展で発表した《NEW HORIZON》です。そう、英語の教科書のタイトルと同じですね。テーマ探しに苦労しましたが、とっかかりとなったのが、夜の街に煌々と輝く某ハンバーガーチェーン店のロゴマーク「M」。それが気になりつつ、私と同じく「よそ者」とし

て青森県に滞在中のALT（外国語指導助手）6名にインタビューします。彼らの異文化体験を取材しているなかで、ふと「日本初の英語教師は誰?」と思って調べると、江戸末期に日本に密入国し、のちにオランダ通詞に英語を教えた「ラナルド・マクドナルド」という人物でした。M社のピエロととても名前が似ていたことから、私のなかで回路がつながり、ALTの一人にピエロ姿になってもらい、日米の時空間をたゆたう映像作品が完成したのです。

次の作品は、恵比寿映像祭2023に出展した《仮面の正体(海賊盤)》。これはアメリカのロックバンドKISSのコピーバンドWISSを追った映像インスタレーションです。表の巨大LEDスクリーンにライブ風景を、裏に素顔の記録映像を流し、その奥には本家KISSのLP「仮面の正体」を飾り、まさに仮面の表と裏のようなつくりにしました。WISSを知れば知るほど、コピーなのに独自性が立ち上がってくるのですが、それをとらえた人間讃歌のドキュメンタリーに仕上げています。

残念ながら、時間を展望してプランを考えたところで実らないこともあります。人生には台本がないのと同じですよ。でも自分の経験や気づき、興味を突き詰めていくと、自ずと楽しい方向に道筋は開かれるはず。なので好奇心を大切にしてください。



PROFILE

あらか・ゆう | ワシントン大学(アメリカ)で彫刻、東京藝術大学で映像を学ぶ。日英通訳業の経験を活かし、誤訳に着目した制作を始める。近年の主な展覧会は東京都写真美術館(2024年)、十和田市現代美術館(2023年)、ポーラ美術館(2020年)など。



上 荒木悠 《NEW HORIZON》2023年 | 十和田市現代美術館での展示風景 | Photo: Kuniya Oyamada
 中 荒木悠 《仮面の正体(海賊盤)》2023年 | 恵比寿映像祭2023「テクノロジー」での展示風景 | Photo: Yu Araki
 下 荒木悠 《双数綱・第二幕》2023年 | 無人島プロジェクトでの展示風景 | Photo: Yu Araki

女性の生涯を支える産婦人科

佐野友宇子

北海道石狩振興局 保健環境部保健行政室
(北海道江別保健所) 主任技師

産婦人科とは、ゆりかごから墓場まで総合的に女性を診るところです。問診をしてから内診(触診)やエコー、クスコ(腔鏡)などで女性生殖器を診察します。ちょっと怖いと感じるかもしれませんが、かかりつけの産婦人科医をもつことは、プレコンセプションケアでも大事です。

産婦人科には4本柱があって、1本目が「女性生殖器の病気の診断・治療」。生理の異常や性感染症、腫瘍などを見つけて治していきます。2本目は「周産期管理」。妊娠中の母親と胎児、出産直後の母親と新生児を総合的に診て、異常があれば医療的な手立てを講じて、安全な出産をサポートします。3本目は「不妊治療」。世界ではカップル5~6組に1組が不妊症ともいわれ、珍しくない症状です。産婦人科医は、原因を推定して、治療を提案します。覚えておいてほしいのは、男性側に起因する原因が半数近くを占めることです。4本目は「女性ヘルスケア」。思春期から性成熟期、更年期、老年期まで、それぞれの時期における女性の心身にまつわる悩みを解消するためのケアを行います。

次に症例を見てみましょう。症例1は妊

娠・出産の経験がない20代後半の女性。半年前から不正出血あり。診察の結果、ちょっと進んだ子宮頸がんが見つかり、同時化学放射線療法を行うことになりました。これは妊娠の可能性が閉ざされてしまう治療法です。予防と早期発見がなにより大事なので、HPVワクチン接種が可能な年代の方は接種を、そして定期的に頸がん検診を受けてください。

症例2は、妊娠・出産の経験がない50代前半の女性。2年前から不正出血あり。息が苦しいと救急車で運ばれてきました。悪性腫瘍が見つかり、化学療法が検討されたものの入院21日目に亡くなってしまいます。生理や不正出血は女性の健康のバロメーターになるもの。異常を感じたらすぐに産婦人科を受診してください。

症例3は、10代の女性。半年ほど生理がなく、妊娠を疑って産婦人科を受診したところ、妊娠24週と診断されました。予期せぬ妊娠はときに自分を幸福にしないこともあります。自分の身体の決定権をもつのは自分だと理解するためにも、早期の性教育が必要です。

PROFILE

さの・ゆうこ | 前職は産婦人科の臨床医。その経験から自分の心と身体に真摯に向き合う大切さを痛感し、現在は公衆衛生医師として、メタ的な視点からプレコンセプションケアや性教育に取り組んでいる。



負の感情とも向き合って生まれる物語

市原佐都子

劇作家、演出家、小説家、城崎国際アートセンター芸術監督

私は、人間の行動や身体にまつわる生理、それに対して女性として感じる違和感を、私の言語センスと身体感覚でとらえ直して作品にしてみました。今日は、2つの作品をご紹介します。

ひとつは、2017年に初演した《妖精の問題》。「妖精」とは「見えないもの」を表し、社会のなかで見えなくされているものへの問いかけとしてつくりました。創作のきっかけは、その前年に起きた相模原障害者施設殺傷事件です。当時ごくセンセーショナルに報道され、テレビではコメンテーターたちが口々に「許せない事件だ」と発言していました。犯人の行為は許されません。ただ、言葉にしづらいのですが、犯人の考え方はわかってしまう気がしたのです。当時、私は20代で社会通念やプレッシャーに息苦しさを感じていたからかもしれません。しかも、インターネットを見ると私と同じように感じた人が少なくないようでした。そんなふうに優生思想が表出してきた社会も、私のなかの優生思想も恐ろしいと感じて、その感情にしっかりと向き合い、突き詰め、作品にしようと決めたのです。私は劇作家なので、ドキュメンタリーではなくフィクションという表現にこだわりました。

この作品は三部作で、一部「プス」は落語、二部「ゴキブリ」は歌唱、三部「マ

ングルト」はセミナー形式として、性や生を否定する側も描きながら、全体を通して肯定しようと試みています。私が受けてきた「排除」や、私が他者に対してもっている「差別」を飛躍させて物語に落とし込みました。負の側面を直視しないのはすごく恐ろしいことだと思うのです。だから、フィクションを見ることで、現実の世界や自分の心を見つめるという、いわば「鏡」のような作品をつくりました。

もうひとつの作品が《バックスの信女ーホルスタインの雌》。古代ギリシアのエウリピデスが書いたギリシア悲劇を下敷きにして、現代における性と生の物語に書き換えた戯曲です。この作品は、かつて家畜人工授精師だった主婦が、人間本位に扱われ出産を強要される雌ウシにシンパシーを感じながら働いていたというモノログから始まり、ペットのイヌ、人工授精で生まれたヒトとウシのハーフである半神半獣、家畜のウシの魂からなる合唱団の歌と会話劇が続きます。

2つの作品を通して私が言いたかったのは、普段は抑え込んでいる感情や欲望を表に出してみると意外と恐怖を感じなくなったりするので、まずは自分の負の部分も含めた内面と向き合うことが大事なのではないかということです。



上 Q / 市原佐都子 《妖精の問題》 | Photo by Kai Maetani, courtesy of Kyoto Experiment
 中 Q / 市原佐都子 《バックスの信女—ホルスタインの雌》 | Photo by Shun Sato
 下 Q / 市原佐都子 《弱法師》 | ©Theater Commons Tokyo 24/ Photo by Shun Sato

PROFILE

いちばら・さとこ | 桜美林大学で演劇を学び、2011年より劇団Qを主宰している。2019年、『バックスの信女—ホルスタインの雌』にて第64回岸田國士戯曲賞受賞。2023年、世界演劇祭(ドイツ)にて『弱法師』を初演。



DISCUSSION & INQUIRY

私たちの探究心、 アーティストの探究心

印象に残った登壇者の言葉があります。それは市原さんの感想で、「産婦人科の症例に共感してしまうのは物語の力だと思いました。ただのデータではなく、その人の人物像が想像されて胸がぐっと苦しくなりました」。そう聞いた途端、事実を連ねた「情報」だった症例が、ある人の人生の「物語」として感じられました。それは《妖精の問題》のように「鏡」となって、自分の本音を映し出してくれそうです。

講演のあとは意見交換。参加者が5つのグループに分かれ、「時間展望カード[※]」を使い、それぞれが展望する未来と、現在の気がかりを語り合いました。

最後は、意見交換の内容を共有する時間です。高校生と大学生からは、「10年後を想像するのは難しい」「10年後は遠すぎて、人生設計に保険をかけすぎてしまう」という声が聞かれました。社会人の話題の中心は「性教育」。自分の身体をもっと前向きにとらえて「可能性を広げよう」というような伝え方で性教育をやりたいという結論になったといいます。また、年齢に関係なく、現在の不摂生を反省しつつ、「健康になりたい」を目標にしていました。

時間展望により立ち現れてきた「一人ひとりの物語」と、朴さんの締めくくりの

言葉「明日、時間展望がわかるようになるのか、10年先なのか、焦らず向き合っていくという態度で、これからも考え続けたい」をかみしめ、私たちの探究は続きます。

翌日、アーティストの荒木さんと市原さんは、さっそく探究を始めました。朴さんとCoSTEP部門長の奥本素子さんの勧めで訪ねたのは、北海道大学の工藤ありささん。産婦人科医として、男性のプレコンセプションケアの研究に取り組んでいます。

近年は「男性不妊」が認知されてきましたが、1970年代からの50年間で精液の量や濃度、運動率が半減しているという研究結果があるそうです。日本では2021年に秋田県で研究が始まったばかり。その結果を踏まえ、北海道大学で調査を始めるといい、精子の質を向上させる要因などがわかってくると期待されています。

このとき、市原さんは、「強い精子を持つ人が世界征服するのかな」と想像し、「閉経していても妊娠はできる」との事実と科学の進歩に思いをめぐらせていました。これが、新たな探究のタネとなり、市原さんの探究は続いていくのです。

※時間展望カード=10年後の姿を考えるための「未来展望カード」と、それを達成するための懸念点を書き込む「現実カード」、話題提供での発見をメモする「なるほどカード」、質疑応答や意見交換に使用する「質問カード」のこと。



肉の上を粘菌は通った

市原佐都子

ない肉

肉、か。肉、を増やす能力を持ったお母さんはなんとなくいつも不安を抱えています。肉、を増やす能力のあるお母さんだから、肉、肉、というものは世界にたくさんある方がいいのだろうか、少なくともある方がいいのだろうか、肉肉肉とお母さんは増やすのか、肉肉肉肉と増やさないでもいいのかという、地球上の全生命にとつての問題であるはずの、肉の問題を、どうしてもお母さんはお母さんになれるから、お母さんの増やす肉による肉問題として囚われていました。

お母さんは、各駅停車の電車に乗っていました。電車に乗ると、お母さんの正面には目が細く、少し受口で、ショートカットの女が座っていました。化粧つけがなく皮膚は白く湿り気があり、頬は上気してリンゴのようにむらのある天然の赤みがさし、艶のあるショートカットの後ろ髪が寝ぐせで跳ねているのが、彼女が笑い首を動かす度

に揺れています。薄汚れた肌色のハイウエストのチノパンは彼女の下半身の肉で膨れていて、家に帰って脱いだときにはウエストのボタンの跡がピンク色にくつきりと彼女の白い下腹に残るでしょう。電車が次の駅に停車する。日曜日、外から太陽の光が差し込んでいます。その光が彼女の湿り気のある肌をテカらせています。そのことに気を取られていたのですが、ふと彼女の顔から斜め下に視線を逸らすと、彼女の隣には彼女と同じ顔の子供が座っています。彼女は彼女の娘と笑い合っていたのです。彼女の娘の髪は無造作に一本に結ばれています。それはポニーテールという印象ではない。ブラシを使わないで結んだのか、髪の毛の表面は撫で付けられず、ぼこぼこしています。しかし、結び目も中心にはありませんでした。それからまた電車が次の停車駅で止まると、彼女と同じ顔の娘の隣にはまた同じ顔の子供が増えています。彼女の息子です。彼女の息子は坊主頭で母と同じ受け口の口をぽかりと開けて電車の広告を放心して見えています。気が付くと彼女の娘や息子は各駅に電車が止まる毎に増え続けているように、電車の中は大中小と大きさの違いはありますが、母と同じ顔の子供で溢れています。髪型や洋服はどれも整えられた感じがしません。工場で大量に生産された安い衣類が色褪せている。お下がりを順番に着させられているのでもなく、誰の服という意識

汗をかいていましたが、電車の中では恐怖で冷や汗をかいていたのです。電車の中は寒いくらいクーラーがきいているので冷や汗がクーラーの冷気で更に冷やされ、さらに寒くて具合が悪くなりそうです。早くこの電車を降りたい。こうしてお母さんは、この飼育小屋に更に肉を増やさないと決めました。だから私は産まれませんでした。肉になって生まれることだけが存在ではありません。私の声は誰も聞いていなくても、響くことがあります。

ある肉

人間の食べる肉っていうのは、動物を殺して心臓から押し出されている血液をどばどばだされて切り刻んだ死体の破片のことというのがありますが、私のような肉には死体はなく破片のみタイプの、最新の肉です。もはや肉は飼育小屋で動物に草を与えてうんこやゲップをさせて太らせるのではなくて、シャーレの上で分裂、成長させる

ものとなりました。私は痛みを感じたり、感情を持つ、そのような複雑な神経も脳もなく、ただ破片としてだけあります。人間はそういう痛みを感じない感情のない肉の破片のみである私をずっと待っていたはずです。むぎたての赤ちゃんのお尻のような肉片がぷりぷりと発生して、手ぬぐいを被った田舎娘とおばあちゃんが桃のように肉を摘んだもの頂く。そのように肉を食べることが夢でした。動物が悲鳴をあげて殺されて血をどばどば出されて死体から肉片を頂くというのは人間にとつて、きもいことです。それを極力人間は知りたくないので、ばれないようにします。きもいと食欲が失せてしまいますから。目立たないところで誰かが殺して、血をきれいに洗い流して切り刻んでつくられた破片を、あたかも破片として誕生したかのようにプラスチックのお花と並べてラップをかけています。なので私はきもくない肉ということになるはずです。だって死体の切り刻まれたものではありません。果実畑には実っていませんが、シャーレの上で破片のみが生成されたのですから。

だけど私もきもいと言われています。私のような破片のみである肉を食べたくないという人は、私が死んだり産まれたりする生命の輪のなかからはみ出ていることをきもがっています。地球儀には載っていないのに突然空中に浮いている名前も歴史もない

新しい国のようなきもさです。うそみたいです。ですから人間は私のことを「うその肉」と呼びます。動物を殺して切り刻んでつくった肉を「ほんとうの肉」と呼びます。味は「ほんとうの肉」のようだ？ いやなんか「ほんとうの肉」と違う？ 質感が、「ほんとうの肉」じゃないとか、こっちは肉のなりすましであるからちやっかり私が口に入らないように警戒されています。大豆とか植物由来のものであればもつと簡単ですが、私のように牛の欠片から増やされたとなると、きもさ百倍です。いくら安全だから信用しろと言っても無理です。なんとなく、きもい、このなんとなくはとても強いのです。いくらこちらのほうが栄養素が多く脂質ゼロであったとしても、そのことさえもマイナス、そのあざとさがなおのこときもいことになります。

しかしそのような人間の声は私に届きません。シャーレに、ただ一欠片の肉がなんの音もたてずにぽつりとあるだけです。私はシャーレの上で産声もあげず、とても静かでした。耳はありませんが。シャーレ、培養皿、という飾りのないガラス皿の上で私は生成されていますが、私は食品として生成させられている肉ですから、いつかとも賑やかな子供のたくさんいる「ビックダディー」のような家で、保険会社のノベルティのデイズニーの様々な動植物の描かれた賑やかな皿の上に山盛りの肉団子に変態

して乗っかることもあり得るのではないかと思います。私は何度も言うように肉の破片のみの肉ですから、性別ありませんし、子孫をつくる、骨盤、卵巣、卵管、子宮、陰、精巣、精管、前立腺、精嚢、陰莖、もありません。しかし、それらのパーツもそれを機能させる全体を持った肉体の持ち主である子供の口に私が入って、その子供の肉となると？ そうなると、私も生き物の輪に、足はないですが、片足を入れることになるのでしょうか。もしくは、私のような肉が流通することで、世界がもつと静かで涼しいところになれば、産まれても良いという生命は増えるのでしょうか。そうすると私は生命の輪に入ることになるのでしょうか。まわりまわって、骨盤、卵巣、卵管、子宮、陰、精巣、精管、前立腺、精嚢、陰莖のない私でも生命のお母さんやお父さんとなるでしょうか。私の子供に自分の肉を食べさせてその子供の中で生きる、生命でないものが生きる、ということが可能になるのでしょうか。しかし現状の私はこんなことを想像する脳もなくなつたシャーレの上の肉の破片です。

「想像する脳もなくなつたシャーレの上の肉の破片」これはことわざっぽいです。「うその肉」のうそことわざ。「想像せぬ肉は、想像される」「生きよと言われた肉ほど、生に迷う」「誰にも噛まれぬ肉は、皿の上」「考えぬ肉は、皿の上でも眠らぬ」ことわ

ぎは、誰が言ったのかわからないけれど、誰もが共感するものです。集合的な経験の結晶です。私の中にもことわざはあるのでしょうか。私の肉片は輪の中にいた生き物の欠片からできたのですから、生き物の痕跡は持っています。その痕跡には何万年もかけて引き継いできた経験の結晶、言葉でないことわざのようなものが含まれているのでしょうか。私もそれを引き継いでいるとは、胸はないですが、胸を張れないのは、皿の上に肉はあっても、証明できる肉体という皿がないからです。「皿の上に肉はあっても、証明できる肉体という皿がない」あ、これはことわざっぽいです。でも誰とも共感しあえないのならことわざとは言えませぬね。

肉の上を粘菌は通った

ゾル、ゲル、硬いゲル、ゾル、ゲル、硬いゲル、ゾル、ゲル、硬いゲル、ゾル、ゲル、硬いゲル、肉の上を粘菌は通った。粘菌はこの世界の隅から隅まで通って、その通過の跡でこの世界のすべて覚えていた。粘菌にとって思考することは運動すること。